

「ヨーロッパ文明の形式」としての国民国家

—カール・ハインツ・ボーラーによるドイツ政治文化批評(続)—

川 合 全 弘

Nation-state as “the Form of the European Civilization”: The Criticism of German Political Culture by Karl Heinz Bohrer (II)

Masahiro KAWAI

〈1〉はじめに

前稿¹⁾に続き、本稿ではカール・ハインツ・ボーラーの政治評論を取り上げ、それらをテーマ毎に3つに分けて、その要約を試みる。共同研究プロジェクト「帝国・国家・地域——21世紀の世界秩序を求めて——」の一環として、本稿で対象とするのは、ボーラーが2002年から2008年にかけて『メルクル』誌上に発表した論文の中で、ドイツ人の国民国家観とヨーロッパ観とを文明論的な視点から批判的に論じた数篇である。

第2次大戦後、ドイツ人は、国民国家を忌避する一方で、ヨーロッパの地域統合とその中にその一員として溶け込むことを熱望する際立った傾向を示してきた。この脱国民国家的で親ヨーロッパ的な戦後ドイツ人の姿勢は、言うまでもなく、ナチズムの経験とその反省のあり方とに深く結びついている。すなわちナチズムが総じて国民的偉大さへの過剰な——ないしは誤った——熱意の表現として総括されたがゆえに、戦後の趨勢として、国民的なるものへの思い入れをヨーロッパという一層大きな全体の中で抑制ないし解消することが是とされた、と言えよう。この意味で、「過去の克服」と「西側結合」とは、戦後ドイツの政治文化を支える土台であり、二つの主要な支柱であった²⁾。

さてボーラーは、このような政治文化の評価をめぐるドイツの論壇において特異な地位を占める。ここでは立ち入らないが、ボーラーの政治評論の特徴は、要するに、国民国家的なるものとヨーロッパ的ななるものとを対立的に捉えず、むしろ前者を——人権、民主主義、資本主義と並ぶ——「ヨーロッパ文明の形式」の一つとして理解する点にある³⁾。今日一般にドイツの論壇と政界では、ナチズムの過去ゆえの国民国家忌避を背景に、国民国家をグローバリズムと地域統合の時代においてすでに乗り越えられた野蛮な過去の遺物と見なす傾向が一般的であり、この思潮の中でドイツ人の国民国家忌避とヨーロッパ統合熱とが、しばしばポスト・ナショナルな時代の先頭を行く政治的先進性の証と

見なされさえする。左翼リベラルから保守リベラルに至る主流のこの支配的傾向に、ドイツ国民国家の独自性への固執として現われるノン・コンフォーミスト的知識人の少数派⁹⁾が対峙する構図が、今日のドイツ論壇の政治的配置を規定している。

他方、ポーラーの国民国家観は、主流のそれとも少数派のそれとも異なり、国民国家を反ヨーロッパ的なもの、ドイツに独自のものは見ない。主流の脱国民国家傾向に対するポーラーの批判は、ドイツ国民国家の独自性主張に依拠するものでなく、むしろ英仏を代表とするヨーロッパ諸国民の文明論的国家観を基準とするものである。言い換えれば、国民国家が近代ヨーロッパ文明の政治形式にあたること、ドイツ人による国民国家の忌避が野蛮な政治の忌避でなく、むしろ文明論的な政治の無理解と忌避にほかならぬこと、文明に対するこの無理解と忌避が単に政治的次元にとどまるものでなく、——庶民性と大食を唯一の芸とする連邦宰相の田舎者根性と首都らしからぬベルリンの醜悪な外観とから、かつてのナチス民俗学を思わせる広く流行したエコロジー熱に至る——ドイツ人の社会と文化の全領域に及ぶものであること、総じて都会的な交際と文明的な生活の形式が何であるかを理解できないドイツ人の無能力がドイツ政治の無能力の真因であること、これらがポーラーによるドイツ政治文化批評の要素を成している。かかるポーラーの視角から見れば、戦後ドイツ人の脱国民国家傾向は、政治的先進性の証であるどころか、従来まともな国民国家を築いたことのないドイツ人の野蛮な政治伝統の帰結にほかならない。

本稿で取り上げる数篇において、ポーラーが用いるキーワードは「様式 (Stil)」である。通常は芸術や文学において用いられるこの概念を、ポーラーは、ここでは「同時代人の生活様式、彼らの社会の様式」を指す言葉として用いる。ポーラーによれば、ドイツ人とその社会の特徴は、「様式の意義に対する無理解」と「様式意識の完全な脱落」、要するに「様式喪失」にあり、このことがドイツ人の「国民的無能力」の原因を成している。以下において、第一にドイツ人の様式喪失と国民的無能力について論じた2篇を、第二にこの点に関するナチス期と戦後期との同等性について論じた1篇を、第三に今日ヨーロッパ全体に広がる様式喪失の傾向を論じた3篇を、要約を通じて紹介する。これらを通じて、イデオロギー的政治批判と一線を描しつつ、ドイツ政治文化の現況をまざまざと浮彫にする、ポーラーの文明論的政治評論の批判的な質の高さを明らかにしたい。

〈2〉ドイツ政治の様式喪失について

ポーラーは1984年に「国家の美学」と題する論文を『メルクール』誌上に発表し、国家の威厳を象徴する形式を欠いた連邦共和国の現状を辛辣に批判した。ファッションの特徴を「政治の美学化」に見るヴァルター・ベンヤミンのテーゼ以来、政治と美を結びつけて論じることがタブー視されてきたドイツ論壇において、ポーラーのこの論文は、大きなセンセーションを巻き起こすと同時に、文明論

的に基礎付けられた彼の政治評論の旗幟を鮮明にする記念碑的な論文ともなった。ここでは、再統一を果たし、「ベルリン共和国」となったドイツを対象に、ボーラーが再び真正面からドイツ国家の美学的現況を論じた2篇の論文を取り上げる。

『様式あるいは“マニエラ”？——国民的無能力のアクチュアリティと歴史——』⁵⁾

ドイツにおける様式の問題がまだ片付いていない問題であるということは、私にとって比較的後になって分かったことである。たしかに、あれこれが良くない様式だというようなことが日常的に言われるが、その際に念頭に置かれていることは、エチケットへの抵触のような事柄にすぎない。しかしながら自己描写の能力としての様式は、それよりももっと高次元のものである。それが何でないかが私にとって一層明瞭となったのは、ロンドンで支店長を務める私の友人の銀行家が、就任の際に、イギリス人の銀行家とドイツ本店のドイツ人同僚とを招いたときである。ドイツ人参加者の欠陥を概念によって言い表すとするなら、それは、表現能力の欠如、すなわち自らの私的な状況を越えて、自らの本物さを言わば様式化し、態度と言葉の中に——専門、銀行、金の知識を越えた——権威を行渡らせる力の欠如である、と言いうる。イギリス人との交際で困った点、つまりドイツ人銀行家たちの寄る辺なさは、不手際に、つまり何か不適切なことを言ってしまうことにあるのではなかった。むしろ困った点は、彼らが何も言わないことにあった。午後を上機嫌に過ごしたいというイギリス人の——性格の音色と自己意識のオリジナリティとが混じり合った——気持ちに比べて、ホストが驚いたことに、ドイツ人の退屈な不在はますます鬱陶しくなった。ドイツ人に欠けていたものは、思うに、16世紀にイタリアの作家カスティリオーネがラファエロの様式の軽快さを例に引いて「マニエラ」と名づけたものであった。それは、単にその絵の様式ではなく、その人格の能力であった。

さて様式を持つ者が全てラファエロのような人物ではないし、その限りで様式は芸術家のオリジナリティと等値されうるわけではない。様々な様式について語りうるが、ここでのテーマは、同時代人の生活様式、彼らの社会の様式である。その際に忘れてならないことは、伝統的な様式論における様式概念がもっぱら文学的芸術的現象のみを考慮し、社会的現象を念頭に置いてこなかった、ということである。しかしながらこうした諸現象は互に関連しているのである。様式とは、目下インフレ的に流行している主観的な強迫観念の意味における理解とは異なって、むしろ日常的自明的なものを一段と高めることと見なされてきた。「stilus」という古代の用語について語るか、様式とは人間そのものであるというビュフォンの有名な命題について語るかは別として、重要なことは常に、単にトートロジー的に感じ取られたものを客観化する能力である。それゆえ様式能力とは、ある事柄に関して特別の表現によって相手に特別に語りかける、知的反省の能力である。それゆえ事柄 (Sache) は、1789年にゲーテが次のように定式化したように、その都度の様式の見ごせない原因 (Ursache) である。曰く、様式は、まだ単なる主観性の領域にとどまる単純な模倣や技巧と異なり、「認識の最も

深い土台」に基づく、と。

表現という概念は、客観的基準に関わる。それは、単なる主観的な自己描写ではなく、超越する集中性の印である。ヴァザーリ以来、マニエラという概念にはこのような区別が含まれている。ここでは、このようなマニエラ概念に照らして、ここで国民的無能力と呼ぶものを検証してみよう。表現とは、単に主観的なものを絶えず乗り越え、ある普遍的なものとの関連を保つことである。そのときマニエラは様式となる。

冒頭に挙げた表現喪失のシーンについては、いくらでも類似の例を追加しうる。それはけっして個人的な不全であるのではなく、むしろドイツ人の表現喪失の根本構造であり、この社会に広く認められる、形式への無能力である。ドイツ人は、形式的に独特に振舞うことを教えられていない。それゆえドイツ的な付き合いの場面が、言わば自然発生的に繰り返し生じる。集団においては感情的なものに表現を与えることができるとしても、個人的な試験台においては、誰も面白いことを言えず、何かを表現しようとして悩ましい努力を続けた揚句、あの重苦しい雰囲気を生んでしまう、といった事態がそれである。このような一団においては、ウィットを披露する者はそれだけでもう剰余の代表になってしまう。というのも、彼はもはや私的にのみ振舞っていないからである。心理学的に見ると、様式の剰余に到達しないことは、私的なものに固執することを意味する。例えば、ビールやワインの入った無数のグラスをただ漫然と空にしなが、人々は互いに根本的に私的に語り続ける、というような場面がそれである。

このようなドイツ的場面の表現喪失性は、個人の表現がその力を受け取りうる一層高次の関連の不在に起因している。このことがはっきりと分かるのは、退屈な空虚の場面に、ドイツの上層では様式と見なされている農場領主的な方法の表現が現われるときである。一例を挙げよう。連邦宰相が外国の賓客を私的な食事会に招待し、豚の胃袋詰め料理やカレー・ソーセージでもてなした、とする。このことを彼は個人的な独創性と思い込んでいる。おまけに、ドイツ世論の多数派が——言わば硬直した形式に自然さを対置することに独創性を見出しうるという——同じ理由によってこの珍事に賛意を表明する、ということも考えられよう。ここでとりわけ解明されるべきことは、このような独創性の主張に対して、ここで言うマニエラの意味において正当性を認めうるか否か、ということである。答えはもちろん否である。というのも、外国の政治エリートを庶民的な自然さで迎えるということが、ここでは、不意の個人的着想を基礎とする——しかし本来弁えるべき距離を保った——特別のジェスチャーとして行われているわけではないからである。むしろここでは、ホストの唐突で無反省の本物さが全くドイツ的庶民的な交際の意味において発散されている。つまり「全く馴れ馴れしく」振舞うことが許される近しさを追求する、という意味において。ここに典型的に示されているものは、あらゆる伝統的な形式に対する、また——奇矯な大政治家にしばしば見られるような——主観的表現の実際に美的に納得のゆく物腰に対する、——むしろ私性と呼ぶべき——いわゆる個人性の優位であ

る。そうであるがゆえに、我々はここに様式の欠如ないし表現の欠如を指摘しなければならないのである。

ところでこのような様式欠如こそを連邦共和国の様式と見なし、そこに、新しい平等社会の意味において革新的な表現と自己意識の印とを見出しうるという着想が、説明として念頭に浮かぶこともありえよう。そのような説明を批判するために、二つの例を挙げてみよう。一つは、連邦議会においてPDSの議員がアメリカ大統領に対して大声で野次を飛ばした例であり、もう一つは、西独の学生がピザを片手に大学の教室に入ってくる、日頃よく見かける光景である。二つの例に共通することは、その場の客観的で象徴的な意義の絶対的無視である。PDSの議員は自らの行為が上院の代表的な機能を傷つける意味をどれほど有しているかを知らず、西独の学生はもはや大学という制度と全く関わりを失っている。これらの事例で問題となることは、単なるエチケットの侵害、すなわち伝来の形式と儀礼的に定められた様式の無視ではなく、むしろより高い必然性の表現としての様式意識の完全な脱落なのである。

一般的な様式喪失の最も顕著な例は、ブランデンブルク門の装飾である。修復スポンサーのドイツ・テレコムは、この重要な場の名前と建造物がどれほどの象徴的なオーラを有し、それがプロイセンのみならずドイツ国民についての、どれほど複雑な記念碑を展示しているかを全く気にかけず、自社の広告のために、擬古典主義の柱を布で被ってサッカー選手の脚の形にすることを面白い着想と考えたのである。ここにも「マニエラ」解釈の滑稽版が示されている。すなわち、国民的象徴論の喪失を、サッカーの世界選手権という実際的な動機に由来するアイロニカルな遊びによって補う、という着想がそれである。この国では、とりわけ政治的正しさの陣営においてこのような解説の支持者が多くいる。しかしこのような解説が、凡俗なデザイナーの個人的冗談を超えることのない思いつきを誤魔化すものに過ぎないことは明白である。それはプチブルの表現能力にほかならない。

様式欠落は、連邦共和国における実際的な原因から説明されうるのか、それとももっと深い歴史的な原因から説明されうるのか。まず、ニーチェの指摘に従って、後者から始めよう。

実際的なドイツの様式欠如が文化規範を犠牲にした私的直接性に帰着することをすでに見たが、ニーチェも、19世紀後半のドイツ文化を批判する際、ドイツ詩における同様の対立を指摘した。すなわち、ドイツ詩においては直接性と自然主義原理とが抽象と引用とに対立している、と。この見方には説明が要る。それは、ニーチェ自身の悲劇論文のロマン主義的端緒及びワーグナー楽劇との結びつきからの、彼の転換と同時に成立した。ニーチェは、とりわけ『人間的な、あまりに人間的な』の中で、ゲーテの後期象徴化様式を志向する寓話的普遍性の美学を展開することによって、ドイツ・モデルネの始まりつつある自然主義に対抗した。つまり、そこでは自然性、直接性、本物性が原則となり、これに対してニーチェは芸術性、外見、伝統を対置したのである。

ニーチェの書において問題とされているものは、古代的な芸術観と近代的なそれとの競合ではな

く、むしろ様式と非様式との区別である。ニーチェの批判の出発点は、とりわけ現在の韻文に顕著な、トゥキュディデスやタキトゥスなどの——その様式が不死生の印に仕えた——偉大な古代の模範に対する無頓着である。彼はこう断言する。「今日の文化民族の中でドイツ人ほど悪しき韻文を書くものはない。フランス人なら、ドイツには韻文がない、と言うだろう。ドイツ人はただ即興された詩しか知らない。」模範喪失と伝統喪失をオリジナリティとして理解する試みは、ニーチェによってことごとく辛辣に扱われる。彼の結論はこうである。「様式の毀損の主原因。人がある事柄に対して実際に持っている以上の感情を示そうとすると、様式は損なわれる。むしろあらゆる偉大な芸術は、それと逆の傾向を持つ。それらは、倫理的に重要な人間と同様、感情をその道に止め、最後まで走らせないことを好む。半分だけの感情-可視性というこの恥じらいは、例えばソフォクレスに最も美しい形で認められる。」ニーチェにとって Expression という激しい表現が「マニエラ」の可能性としてなぜ考慮されないかが、ここに明らかである。むしろその逆に、過剰な表出傾向こそ様式喪失の原因なのである。

ニーチェにあっては、同時代のドイツ詩の表現可能性に対立して一面的に古代的な趣味が称揚されている、と言うことはできない。彼がローマの模範を参照したのは、自己目的としてではなく、抑制された表現のパラダイムとしてであった。ニーチェにとって重要であったのは、新人文主義的な教養市民層の理想ではなく、韻文的語りの厳格な規律である。そこにおいて様式はエートスとなる。ニーチェにとって、エートス、性格となった様式、それこそ様式を構成するものの本来的定義である。そしてその限りにおいて、ドイツ詩に対する彼の批判は、無性格社会としての同時代のドイツ社会に対する批判でもある。美から倫理への転化は、自然主義的表出的形式に対置されたニーチェの様式理念本来の文化批判的核心である。その際、ローマ帝政期やアテネ権勢期やフランス 17 世紀の詩が模範とされるとするならば、1870 年代のドイツ社会に対するニーチェの批判には貴族主義的原理が関与している、とは言えよう。しかしながらニーチェが望んだことは、社会的プロセスの反動的な様式化ではなく、むしろボードレールと同様に、彼の目に脅かされていると映じた文明の要因を想起することであった。

ニーチェが習俗のデカダンスの実際的徴候として診断したものは、ドイツの通則として認識される。ドイツ諸邦の市民社会においては、N. エリアスが述べたように、ヨーロッパの大市民層や市民層さえもが示すような貴族的要素が全く見られない。これに関して留意すべきは、18 世紀にドイツの作家の間で促進された、フランスの高級形式たるヴェルサイユに対する反感、つまり宮廷の高級貴族的なエチケットや古典悲劇の英雄的形式に対する反感である。ここから、冒頭で描いたような仲間付き合いの私性も、歴史的に理解されるものとなる。宮廷、サロン、その会話文化に対して、市民的な個性がボレーミッシュに対置されたのである。自制や観察力や当意即妙のようなあらゆる宮廷的美徳に対する違和感があまりにも強かったために、非宮廷的な態度の伝統のないいわゆる「内気」が、ド

イツでは新しい理想と成りえた。宮廷的形式主義に対する嘲笑は、実践的には形式喪失を原則として据えることに帰着した。このことは、革新的天才的に受け止められた自然主義の名において遂行されたために、高尚化された。それは、なかならず、感情のコスモスとしてのシェークスピアの発見に依拠した。ドイツ的な対抗様式へのこうしたパースペクティブにとっては、ドイツにおける最大のシェークスピア受容者たるゲーテの作品が、その自然主義的感情の部分についてだけ受容され、象徴主義的擬古典主義的部分については受容されてこなかった、とういうことは甚だ興味深い。ゲーテの人物像は、政治的制度の欠如の中でドイツ教養市民層の自己同一化対象となったものの、シラーの場合と異なり、終始、距離のある異質なそれにとどまった。

問題の歴史化のためには、様式喪失についてニーチェが立てた上述の計算だけで十分である。様式喪失は、後になってようやく成功したドイツ文化国民形成の言わば代償であった。要するに、絶えず表現強迫の下に置かれて、人は、大きな形式意識の意味における表現に実際には達しなかったのである。ニーチェの見方において決定的な点は、規範意識の意味における様式の欠如から、様式と呼びうるような表現能力は育たない、ということである。

このような背景の下で見ると、20世紀にドイツにおいて大きな形式に依拠する様式が——ファシスト的形式実験の意味において——追求された唯一の時代がナチズム期であるということは、驚くべきであると同時に挑発的でもある洞察である。その際、バウハウスが対抗像となった。ナチの擬古典主義とバウハウス、この対比については後でまた触れよう。後期ロマン派的ビーダーマイアー的絵画を志向したナチの牧歌画との矛盾についてはここで立ち入らないが、擬古典主義的形式に再接続することがナチ建築の責務であったという事実は、あたかもドイツの様式貧困を滑稽化して描いた作品のように映じる。

ナチスによる大きな様式の占有に言及することによって、我々はドイツの様式問題の実際的な原因に立ち入ることになる。その際、様式と表現という、互いに関連する対概念の新しい配置が生じる。ニーチェがドイツ詩の表現能力を否認せず、その様式としての質を否認したとするならば、ナチズムに関する解答としては、単に様式ジェスチャーのみならず表現集中性自体についても、否認されてきたように思われる。電話会社がブランデンブルク門の柱を臆面もなく凡庸さで台無しにできたことは、一方であらゆる様式伝統との深い断絶と関わっているが、同時に他方でそこには表現一般の欠如も見て取れる。ナチズムは、形式との断絶、すなわち形式の中に据えられた市民的な法の体制とのセンセーショナルな断絶をもって始まった。それに代わって、実存的決断主義的基準を有する法思想家としてのナチ知識人によって別の法が設定された。ここにもまた形式主義と主観主義的な内容性との対立が見て取れる。他方で法形式のこのような墮落には、ベンヤミンによって認識された、誇張された——日常の諸現象、ことに公的な言語、スポーツ、党大会、討論会に際する——様式の優位（「政治の美学化」）が伴った。

連邦共和国の様式喪失は、ここから、様式のナチ的倒錯に対する回答として説明されうる。西独が法形式を再建し、そこに法治国家と民主主義の最終的に成功した実験を見なければならなくなったことによって、人々は形式のそれ以外の全ての要求に対して確信を持ってないままの状態にとどまったのである。人々は、言わばナチ的形式パトスへの解毒剤として唯一生き残った公分母たるパウハウスに同意した。当然ながらその際、その個性的な様式表現は失われた。それはユートピアなきパウハウスである。この欠落を埋めるものは被害-利用-合理主義である。これに相応しいのは、豊かになったが小市民的な特徴を持った新しい社会であり、そこでは、良き、ないし大市民的な交際形式は影響力を失った。このことは、とりわけ50年代と60年代に新たに建てられた一戸建て住宅に見て取れる。その限られた広さにはなく、むしろそのインテリア、形式、色彩にである。そしてこのことは戦後建築全体に妥当する。町並みの画一的な醜悪さは、かつては魅力的であった市民的パサージュを破壊してしまった。これは何をもたらすのか。すなわち、人間が見るものが、彼に影響を与えるのである。このような眺めが50年来儉約銀行の儉約モデルを生産し続けている。人々は多くの緑、自然のままのその繁茂、手入れされない公園に満足している。あたかも都市を形成するものは、石ではなく緑であるかのように！ここにも、様式ないし「マニエラ」に対する自然主義的な趣味の優位が現われている。この所見を冷めた文で要約すると、新たな中産層の住居-象徴要求は、比較的儉しい、と云う。もっと正確に言えば、表現喪失、と。

『国家の美学・再論』⁶⁾

旧篇は、旧連邦共和国における政治の象徴形式の欠如——自らを甘やかす意志の新たな快樂主義、田舎者根性、最も無害で最も安全だが、ヨーロッパ中で最も退屈な国、どんな公的形式をも破壊する醜悪な私人——を風刺したものであった。当然ながら、美的基準の選択は一つの挑発を意味した。今日では誰もが口にする「美学」という言葉は、当時不穏当な言葉であり、「国家」という概念と結びつけられた場合には、なおさらそうであった。ベンヤミンがファシズムを政治の美学化と同一視したことは、政治に関する知的議論を支配した上、ボン共和国における象徴形式の欠如を正当化する基本公式の一つとなった。この共和国の自主的な最小主義、言わばパウハウス様式の倒錯は、第三帝国の熱狂主義の帰結でもあった。こうして旧篇への論争的反応が生じざるをえず、とりわけ大学においてそうであった。そのプラグマティックで社会学的な志向性を持つ環境においては、美的基準はただちに時代遅れなものに見なされ、特にそれが政治の場へと応用されるときには、センセーショナルなものに見なされた。こうしてボン共和国の美学に向けられた論争的な問いが引き起こした騒動を一言に要約すれば、掟破りであり、左翼リベラルと場合によっては保守派もが依拠したアブリオリの侵犯であった。

この十数年間に状況が変化したことは、この古い問いがもはや怒りも抗議も呼ばないことから見て

取れる。しかしながら、イデオロギー的に設定された敷居を精神的に踏み越えることは、イデオロギー的にタブー化された空間を具体的に満たすこととは異なる。それゆえ美的象徴的に構造化された公共性のかつての欠如は、本当に変化したのか、ということがあらためて問われなければならない。

この疑問を打ち消しうるような新しい現象形式は存在するだろうか。新しく古い首都——象徴として高い地位を占める場——は、ボン議会のきわめて危うい多数派によって選ばれたにすぎない。主権を回復した国家の新しい外交は、国民の歴史と象徴的公共性とを「異端宣告」と受け止めるような政治観の持ち主たちによって担われている。中心的なタブーは、実際、「ドイツ」の名称と現実であった。そこにおける逆説は、この言葉を何か別のポスト・ナショナルないしトランス・ナショナルな言葉で置き換えたいという立場の代表者たちが、自らのプロパガンダを、奇妙に「チュートンのな」仕方、つまり島国的で非政治的でセンチメンタルな仕方ですべて遂行してきた、という事実である。

ベルリン共和国の国家美学を新たなパースペクティブにおいて語るためには、もう一つの変化した条件、すなわち、90年代半ば以降、象徴論的な自己描写への意志が、まさしくそれを最も強烈に体现してきた2国たるイギリスとフランスとにおいて変化を被ってきた、という事実を計算に入れなければならない。つまり、国家象徴主義が別のより私的な形式に席を譲ったのである。こうして、先に確認された欠陥は、今後どのように映じるであろうか。

芸術史家のH.クロツツの判断によれば、ボンの国家建築は、平凡で、小心翼翼とし、退屈である。“再び偉大幻想に陥るのではないか”という不安を背負わされた国家の「パッとしない愚直さ」は、あらゆる野心的領域、とりわけ精神科学にも伝染した。そこでは、伝統の偉大なものは忌避され、平凡に無害なもの、信頼感を呼ぶ合理的なものへと刈り込まれた。「機能」が呪文となった。実質的なカテゴリーにおいて把握された全ての観念は、この語のインフレ的使用へと通じた。曰く機能エリート、曰く文学の機能史。全ては何かであるのではなく、何かとして機能した。この語の片割れは「構造」であった。事件史、人物史、文化史に代わって、構造史と社会史の台頭。もちろん機能概念は自らの高尚な根拠を、この概念の本来前衛的な意義の中に持ち、それによって半世紀の間自らを正当化してきた。

他方首都ベルリンの建築について見るならば、国家美学の意味において実際に成功した——とはいえ改築にすぎない——唯一の建物たるドイツ議会を除けば、歴史的な文脈に対する感覚を欠いたつむじ曲がり（宰相府）か、あるいは様式上の中途半端さ、もしくは無趣味さ（パリ広場とポツダム広場の建築）が目につく。しかも、帝国議会に根を持つ連邦議会の国民的象徴論でさえ、その特徴的に旧連邦共和国的な相対化を、「ドイツ民族」への古い献詞を「住民」という言葉によって妨害するという、政治芸術家H.ハーケの思いつきの中に見出している。これの問題点は、政治的な国民がばらばらの住民へと雲散霧消し始める、ということにある。政府区域にその尊厳を与えるものは、結局、残され救い出されたプロイセン擬古典主義——ブランデンブルク門からフンボルト大学や武器庫を経て博物

館島に至る、様々な時期の建築群——だけである。それだけが偉大さを持ち、他の大都市にも凌駕されない。

ところで国家の美学に対する我々の元々の問いにおける中心的なアスペクトの一つは、アゴナールなコミュニケーション形式の欠如であった。「コミュニケーション」という概念は、すでに70年代以来、ある程度連邦共和国の世論の指導的概念となり、最終的で解消できない対立を排除してきた。この欠陥は美的象徴的形式とどのような関わりを有しているのだろうか。それは、例えば政治的論争の形式にかなりの帰結をもたらす。人々は、制度によって強いられる決断の代わりに、合意に執着する永遠の対話という私化された環境の中で活動するようになる。人々はもはや政敵に対して多数党の決断を押し付けようとも思わないし、そうできもしない。こうしたことが連邦議会における自己描写にとって影響を及ぼす。政治的論争の対象がますます小さくなり、それとともにその主体たる論者自身も小さくなる。大学と学校の将来というような大きな国民的テーマが、知的に訓練された能力ある議会人によって議論を通じて公的に決定される代わりに、衰れになるほど頭の悪い田舎政治家によって決定されるのを見るならば、国家美学の欠如において何が含まれているかが分かる。

まさしく形式的にも象徴的にも表現される国民的諸制度のこうした欠陥については、ベルリン共和国になってからも、ほとんど変化がない。象徴的に作用する制度が国家の美学の中心であるとするならば、ボン共和国がそうであったと同様、ベルリン共和国も見苦しい。いずれにせよ明白になったことは、連邦共和国において重要であるのは、美しい外観でなく、放棄しうる外観であり、特にドイツでは伝統的に「外面的」と呼ばれるものをあまりにもぞんざいに扱ってきたがゆえに、なおさらそうである、ということである。外面的なもの、すなわち形式は、誤った仕方でも単なる付属物と見なされてきたが、しかし実際にはそれを通じて何か本質的なものが表れているのである。それは文明の歴史を教示してきたのである。

20年前に問題にしたように、国家美学の中心的アスペクトは議会の演説にある。当時初めて示唆された議論、すなわち国際的にももはや偉大な演説と偉大な事柄とが存在しないという議論を、今ここで取り上げてみよう。レトリックの才あるイギリス首相は、自らの最良の演説を英国議会でなく、米国議会で行った。フランスのエリートの有名な国家レトリックは非常に味気なくなった。ショイブレが共和国の首都としてベルリン案に賛成する演説をしたとき、ドイツにおけるこの種の演説の最後であった。50年代から70年代にかけて、A.アルント、C.シュミット、K.G. キージンガー、H.ヴェーナー、R.バルツェル、W.ブラント、H.シュミットが行ったような演説は、もはや聞くことができない。もはや大きな事柄が存在せず、それゆえ大きな演説もまた存在しないのであろうか。

ドイツ再統一以来、そしてヨーロッパのユートピアの劇的な終焉以来、政治的なファンタジーをかき立てる事柄は、もはや目に付かない。その限りにおいて、国家について文字通り人目を引く（Staat machen）ことは困難となった。大きな事柄は、とりわけ連邦共和国では、小さな事柄の糸玉の背後に

消えてしまった。女性の宰相は小さな事柄について語らざるをえない。これを成熟した妥協力と呼ぶこともできよう。しかし権力とはこういうものではない。従来から見られたアゴナルな決断の欠如が、彼女にあっては、言わば慰撫的な仕方、決断可能性の欠如という新しい現象によって覆い隠されたのである。国家の美学を明瞭に示すレトリックの力によって語られるべき大きな事柄が、女性宰相にとってそもそも存在しなかったのであろうか。女性宰相は、——ドイツの伝統における自由本能の欠如やこの国における自由に対する平等の優越などのような——ときどき躊躇いがちに示唆した事柄について、つまり、ビスマルクの社会立法以来発展してきた、そして連邦共和国の社会的経済的危機とともに明白となってきたこの欠陥について、はっきりと語ることもできたであろう。そうしていたなら、必要な精神的転換のための知的基礎を提供できたであろう。コール政権下では、国家美学に関するおおよそいかなる端緒も存在しなかった。はっきりと分かることは、人を幻滅させるような女性宰相のパフォーマンスが、単に才能や性格の弱さに起因するのではなく、むしろ制度的なものの顕著な腐食に起因する、ということである。

今なお本来の国家美学が見られないとしても、80年代にこの国の公的な外観を特徴づけた最悪の形式の幾つかは消滅した。すなわち、緑の党の太陽=森シグナルによる政治的なものの白紙状態がそれである。当時それは、アングロサクソンのオールド・リベラルの間で、フェルキッシュな自然主義と新興教主義との秘められた関連を想起させるがゆえに、苛立ちを呼び起こしたものである。こうしたチュートン的で緑的な自然主義がベルリン共和国の公的外観から姿を消したことは、公的様式の実際の進歩として注目されうる。

「様式」もまた、この国では従来から恐々扱われる言葉である。この語は、象徴的に作用する制度と政治的レトリックとの問題を包括的に論じるための基盤となりうる。周知のとおり、様式には人間と社会それ自体が示される。様式の欠如が来るヴィルヘルム社会の主たる特徴である、とニーチェは1885年に述べた。それが再現するのであろうか。ベルリン共和国の様式とは何であらうか。そもそもそれは存在するのだろうか。新しい首都は、ドイツの北部、西部、南部の諸都市に対して、ゆたかな影響力を持っているのだろうか。確かなことは、たとえそれがあっても、それは模範の影響力ではない、ということである。事態は全く逆である。ケルンは一層ライン的に、ミュンヘンは一層バイエルンになった。そこには首都へのいささかの関心も見られない。遠心的な傾向がますます増大している。英仏の地方都市における自律の増大にもかかわらず、常に首都に従属した関係と対比してみるならば、このことは国家国民にとって稀なことである、と言わなければならない。従来ドイツは国家国民へと十分に発展できたことは一度もなかった、と言ってよい。新しいベルリンから社会調和体としての輝きを期待することはほとんどできない。戦前期の大市民層の伝統に比肩しうるものは、そこには全く存在しない。卑俗さと小市民性とが今日そこを訪れる者の第一印象である。ウンター・デン・リンデンがクア・フルステンダムよりもまだ様式を有しているとするなら、それはもっぱら、

今なお刻印として残るプロイセン擬古典主義がその空間的存在を通じて最悪の卑俗なレストランと安っぽい娯楽衝動とを抑制しているからである。言い換えれば、18世紀にまで遡る国民政治的代表建築が、東独期の標準化主義と連邦共和国期の最小主義とに耐えて生き残り、象徴を示し、新たな様式意志への勇気づけとして機能しているからである。

とはいえ、さしあたり様式意志と呼びうる独立した力は、今日なお全く認められない。この国の公的な外観と出来事との特徴たる灰色がいたるところで目に立つのである。

〈3〉 ナチズム期と戦後期の同等性について

作家ギュンター・グラスは、西独政治文化の支柱の一つである「過去の克服」の文学的代表とも言わべき左翼リベラルの知識人である。そのグラスが2006年に初めて自らの武装親衛隊員歴を告白したことによって、ドイツの論壇では「過去の克服」の是非をめぐる大きな論議が生じた。次に取り上げるボーラーの——この件をきっかけとして書かれた——論文は、「過去の克服」の政治文化を「政治的道德主義」と特徴づけ、その「本来的な挫折」を論じるものである。その要点は次の三つ、すなわち、第一に政治を道徳に還元する素朴な理想主義がナチズムの罪との取り組み方として適切でないこと、第二に「過去の克服」の政治文化によってもっぱら邪悪な時代として描き出されたナチズム期が、実は素朴で善良な理想主義的政治観という点において戦後期と同等であること、第三にナチズム期と戦後期とに共通する「政治的道德主義」が総じて政治生活の形式として成り立たないこと、これである。

『政治的道德主義の本来的な挫折』⁷⁾

ギュンター・グラスの告白をきっかけとして生じた道徳的な怒りは、とりわけドイツの罪の記憶に関する第一人者が、これほど遅く、つまりアンチ・ファシスト的レトリックを開始して以来ほとんど50年も経ってから、自らの武装親衛隊員の過去について述べ始めたことに向けられたものであった。この騒動を通じて明白となったことは、我々が道徳政治の時代から躊躇いがちに抜け出し始めた、ということである。

ところでグラスの告白における不快さは、その内容ではなく、彼のケースの代表性にあった。第2次大戦後、ドイツの罪ある過去の公的告発者として有名になった知識人の多くが、ナチ的ないし国民反動的な生家の出であるか、自ら第三帝国の政治的青少年組織の熱心なメンバーだった、ということは周知の事実である。問題となるのは、このような出自それ自体ではなく、むしろこの出自から説明される実際的な隠語である。以下では、これについて少し説明してみよう。

ナチ・ミリューと信仰告白的なアンチ・ファシズムとの本来的な同等性が、とりわけ知的エリート

と大学エリート、バーダー＝マインホーフのテロリズムに至るまでの68年世代の多くを貫いている。さて「ヒトラーの子供たち」がこれほど激しくこの過去から離れたことは、本来はむしろもっばら喜ぶべき事柄である。それは、連邦共和国の民主主義国家としての成功に、疑いもなく寄与した出来事であった。とはいえそれでもやはり、主として大学や教会から発するこのような権威の下に狂信的な両親の伝統が隠されていた事実が発見されたことは、やはり衝撃的であった。しかしよく考えてみるならば、ドイツ中産層の圧倒的多数がヒトラー崇拝者であったことは、むしろ必然的なことでもあったように思われる。後年の総括における誤解は、ナチズムに心を動かされた人々を善良な人々と見るのではなく、むしろ彼らを犯罪人として分類したことにあった。「善良な人々」と言っても、それは特殊な意味における善良さではあるが、彼らは言わば純真な人々であり、国民中の道德家たろうとし、世界の煉獄に至るまで全身全霊を賭してヒトラーに入れあげた人々であった。彼らは、ハイデルベルクとマールブルクでドイツ文学、歴史学、哲学を学んだドイツ国権派的な英雄家系の出であり、ブリュッセルとロッテルダムで金を儲けた国際的商家の出ではなかった。十分に読み書きのできた人口の大半がナチになったばかりか、精神科学の多数派までもがそうであったとするなら、戦後、撤回はどこから生じるべきであったろうか。その限りにおいて、指導的なアンチ・ファシストたち、つまり政治にコミットした左翼リベラルと左翼が行ったことは、前に進むために明らかに必要であったことにすぎなかった。しかしそこには難点がある。そしてグラスの告白の時点で、このような時代、その問題設定、——その大仰さと押し付けがましさとにおいてかつての語り口を思わせる——あの「無実者」の恥じらいなき語り口が終わりつつあることが示されたのだから、その難点は正されるべきであった。

「私の過失によって (mea culpa)」のレトリックの中にあるものは、罪の自覚の意図のみならず、むしろそれ以上に、最終的に罪を赦させようとする一種の恐喝の試みである。赦しは、とりわけ被害者自身つまりユダヤ人の仕事であるはずである。ここには、プロテスタント的伝統に由来する知的歪曲がある。数年前に『メルクール』誌上で、かつてのナチ将軍を祖父に持ち、左翼の科学相を父に持つ——上記の「私の過失」の告白に励む——青年と対論した。我々は彼に対して概ね以下のように述べた。知的反省による償いの可能性は存在しない。もし償いがありうるとしたら、それは、反ナチの少数派が戦後にナチ多数派と徹底的に決着をつけるときであろう。唯一そのみが、その名に値する償いである。罪の公的告白が具現する熱狂的なレトリックは、その非常識さと非文明性、その画一的な情動性の点において、ナチの原理主義的な信仰告白を想起させる。市民社会を急進的な道徳的確信の上に打ちたてようとする素朴さも同様である。このようなサークルで唱えられる反資本主義は、「利子奴隷制」というかつてのナチ用語を思わせる。彼らの決まり文句の調子が個人主義的でも階級的でもないことから見て、彼らは今なお民族共同体に生きようとしていることが見て取れる、と。

一連の平和主義的な儀式も、不信仰者には、かつて「ドイツ信仰者の」と呼ばれたものの不吉な臭

いを感じさせる。ドイツの戦後文学——その第一人者がグラスである——は、自らの芸術的な不足分を押し付けがましい道徳主義によって補った。しかしこれは、アメリカの歴史家ヒムメルファーブがE. パーク、J.S. ミル、L. トリリングなどのアングロサクソンの思想家に依拠して「道徳的想像力」の概念の下に要約したものとは根本的に異なる。かつての全体主義的な理想主義との隠れた連関を作り出しているものは、潔白を証明された人々に対して冷笑的ないし論争的に立ち向かう者たちのイデオロギー的な焼印である。

罪告白の要点は、告白を通じて新たな無実を要求しうようになることにあった。これによって、この新たなドイツ信仰者たちが再現する政治的欠陥が明らかとなる。彼らの「罪」は、彼らに対して罪のない時代、つまり政治がもっぱら罪政策としてしか考えられない時代への展望を開いた。その結果、国民国家や、国民性、愛国主義、世界政治への関与、政治の手段としての戦争など、罪を惹起すると見なされたもの全てが政治的カテヒズムから追放されることとなったのである。そのファナティズムは、ナチの狂信を思わせ、また心理学的にはその等価物である。実際ドイツ史をホロコーストの上に据えることは、あたかも犯罪的病理学的狂気を新たな狂気によって悪魔祓いできるかのようを考える点で、その行為自体の倒錯した転倒である。政治のこのような道徳化が政治の無責任の原則へと帰着し、臆病さを隠す美德を装い、世界を邪悪から解放するという不吉なナチのヒステリーを変奏するものであったということは、このようなヒトラーの子供たちにはまだ理解されていない。

残された疑問は、そもそもなぜ罪の記憶の主張が、体制反対派の子供たちによってではなく、もっぱらこれらかつてのナチの子供たちによって唱えられてきたのか、ということである。なぜ前者は、もっとエネルギーに自らを誇示しなかったのだろうか。というのも、たとえ彼らだけが残り、彼らだけが第三帝国の地獄を生き延び、あるいは彼らがかつてのナチを実際に告発したとしても、それでもなお、自国民の犯罪の責任を公的に負う仕事が、やはり彼らに帰せられたであろうからである。これについて思い起こされるのは、R. ダーレンドルフ、J. フェスト、そしてとりわけS. ハフナーである。死後に知られるようになったハフナーの——ナチが徐々に台頭する戦間期を回想した——文章は、ドイツ中産層におけるプレ・ファシスト的メンタリティに関する、部外者の視角からの比類のない証言である。とはいえ、彼が戦後自らの同胞に向けてそれと分かる「反ファシスト的な」発言をしたことは一度もない。W.G. ゼーバルトのことも思い起こされる。ハフナー同様に戦後にドイツを去ったゼーバルトは、ナチ支配を自らの文学上のテーマとしたが、文学的左翼と比べうるようなアクチュアルな論難を全く唱えなかった。これら両名のケースに基調音として流れているものは、——政治的道徳主義者が全く与り知らない——実存的な悲哀であった。ハフナーやゼーバルトやその他若干の人々は、あたかも自分自身のためにようにひそやかに語る術を心得ていた。彼らは常にアウトサイダーであった。彼らの中には、直接7月20日事件に巻き込まれた者もいた。処刑された首謀者達の家族は戦後長らく社会的に無名のままにとどまり、人口の圧倒的多数は7月20日との関わりを全く

持っていなかった。こうして体制反対派のサークルが戦後の知的討論から遠ざかってきた、という印象がますます強まったのである。しかしとりわけ重要なことは、先に名前を挙げたような知識人たちが戦後の討論を長らく支配したあの自己憎悪を全く持たなかった、ということである。明らかにそれこそが、戦後の討論を主導した人々に感情的、創造的な突破力を与えたものであった。彼らは、多数者のために語る善良者であり、かつての市民的遺産の継承者ではなかった。これで、上記の問いはほとんど答えられた、と言えよう。要するに、ナチがドイツにおけるかつての市民文化にも貴族文化にも止めを刺していたのである。いずれにせよ市民層は、この12年間を経た後には、人々の注意を引きうる状況になかった。この12年間の後には、アーデナウアー時代の開始にもかかわらず、事態は明らかに彼らにとってもはや遅すぎたのである。

〈4〉ヨーロッパのデカダンスについて

ボーラーによるドイツ政治文化批評の特徴は、前述のように、戦後ドイツ人における国民国家忌避の傾向を、西欧諸国、とりわけイギリスの政治文化を基準に、非文明性ないし野蛮さの表れとして批判する点にある⁸⁾。しかしながら最近の政治評論において、ボーラーは、国家的なるもの、権力的なるものからの逃避の傾向を、ドイツのみならず、ヨーロッパ文明の模範国イギリスにも見出し、それをヨーロッパの「政治的文化的沈滞の特別の症候」として指摘している。このことが彼のドイツ政治文化批評にどのような影響を及ぼすのか、今のところ定かでない⁹⁾。ここでは、ボーラーの政治評論の行方を占うべく、さしあたりヨーロッパのデカダンスについて述べた3篇を紹介する。

『本号への序』¹⁰⁾

ここ10年来、リベラルで資本主義的な民主主義国、西側、第一世界に対して、外側のイスラム原理主義からも、内側からも、デカダンスの非難が集中的に浴びせられている。新聞の頁をめくり、テレビのスイッチを入れ、街頭に立つとき、この非難にはたしかに一理あるのではないか、という感情に襲われる。厚かましさと無恥との増大として現われる日常生活の低俗化は見逃されるべきでない。本号で問題とするのは、伝統的なヨーロッパのデカダンス理論ではなく、ある文化的政治的沈滞の特別の症候に関する実際的で歴史的な記述である。

デカダンスは元々分析的な概念でなく、闘争的な概念である。そのスキャンダラスな要素を失わないようにしながら、それを冷静かつ分析的なものにする必要がある。つまり、現在とその所与に対する決してなくなならない、かつまた正当な不満を、現象学的な鋭敏さと結びつけることが必要である。そのとき、デカダンス批判は何か中心的な重要性を持ちうるかもしれない、またデカダンスは、非難から、過去数世紀において文明の肯定的な発展に寄与してきたものの特徴づけへと転じるかもしれない

い。社会の文明性は、その社会が女性とホモセクシュアルとをどう扱うかにおいても認識されうる。

17世紀に「デカダンス」とは一国家の軍事的財政的弱さの特徴であり、「偉大さ」の反対概念であった。偉大さを——アメリカという従兄弟は別として——西欧はもはや久しく夢見ていない。しかしながら、デカダンスという蔑称的な反対概念が我々の将来の偉大さの——もう少し慎ましやかに言えば、自尊心の——一部を成しうるとしたなら、どうであろうか。とはいえ、そのためには、まさしく次のような能力が我々に必要であろう。つまり、自己自身を尊重し、この自尊心に相応しい態度様式を育む能力が。ほかならぬ自尊心の欠如は、本号で我々がデカダンスと呼んだものの始まりなのである。

『力への意志の欠如』¹¹⁾

今年の初め、イギリス海軍水兵の一団がイラン海軍に拿捕された。若い水兵達は全く抵抗しなかったばかりか、釈放後、この話をイギリスのメディアに売った。しかもイギリスの国防省と海軍は当初それを容認しさえした。責任ある当局の公的な行動規範のこのような欠落は、有名人崇拜と犠牲者崇拜とによって腐敗した社会という感情を、若干の識者にもたらした。捕虜にされたことについて威厳ある沈黙を守る代わりに、常軌を逸した公然たるおしゃべりを行うこと。これについて保守的なスペクテーター紙は、伝統的な政治倫理の視点からこう書いた。「幾晩もベッドで泣き明かしたという若い水兵の打ち明け話は、泣き濡れた日記の中ではイギリスの威厳がもはや顧みられないものとなってしまった、ということを示している。せいぜい私的なものにとどまり、決して他人と共有されないものが存在する、ということ我々は忘れてしまった。このようなミーハー的告白は明らかに弱さを物語っており、敵を勇気づけて、我々があまりにもデカダンになってしまったためにもはや自分自身を守ることができない、と信じ込ませるだろう。」

目下登場している無品位がここ10年来の深い社会的心理学的変化の兆候——その最初の現われはダイアナ妃の死をめぐるヒステリーであった——である、という認識は、少なくとも次の確信をもたらす。すなわち、勇気、自己統制、礼節感覚といったイギリス教育の伝統的諸価値が低俗な行動様式の波によって押し流されたこと、これである。これには、イギリスのメディアも一役買っている。例えば、ビッグ・ブラザーという言いようのない低俗番組は、今日のイギリス社会状態のアレゴリーである。総じて今日のイギリスのメディアは、古典的な労働者階級と全く関わりのない、新しい下層メンタリティの表現にほかならない。前者は、その威厳ある特徴もろともすでに消滅してしまった。

このようなイギリス社会のシルエットとともに、デカダンスという概念が浮かび上がる。それに毒性を付与するものが、メディア的有名性の崇拜と社会的犠牲の崇拜である。しかしこのような兆候の基礎として一層重要なものは、公的な領域と私的な領域とがもはやほとんど区別されえないという事実である。言い換えれば、公的なものの収縮であり、そこへの私的なものの氾濫である。

かつてカール・マルクスは亡命者としてイギリスを観察し、イギリスには絶えず最初のプロセスが生まれると考え、こう述べた。「イギリスは市民的コスモスの造物主である。」実際、イギリス人は最初にカトリック教会からその首位性を奪い、最初に国王の首を刎ね、最初に農業社会を工業社会に変えた。これら全ては、それまで妥当していた価値を否定する、絶えざる世俗化のプロセスと呼ぶことができよう。メディアであれ、大学であれ、今日のイギリスの公共性の低俗化もまた、愛する神からの離反、陳腐という地獄へのさらなる前進という意味において、このような世俗化のさらなる一步と理解しうる。

かつての世俗化との相違は、冒頭の例が示すように、今や気品ある態度様式の解体が、もはや力の表現でなく、むしろ弱さの表現である、という点にある。言い換えれば、イギリスは文化的政治的没落の段階に入ったのである。それは現象学的にも示されている。公的なイギリスは、単に一層愚鈍になったばかりか、一層醜悪にもなった。ジェントルマンに代わって、30年前に登場したのはフリーガンである。イギリスに現われたデカダンスの兆候とその概念とは、大陸ヨーロッパ、ことにドイツにも妥当するだろうか。

デカダンスの基準は、イギリスよりもドイツに一層明確に当てはまる。歴史的な原因によってこの国が緊急時に際して防衛の能力も意志も持たないことについて、長々とした説明は要らない。「死ぬよりは赤くなる方を選ぶ (Lieber rot als tot)」という、何年か前に有名になったある哲学者の言葉は、国を守って死ぬよりも国を占領されるほうがましだ、というこの国の住民多数派の意思を象徴する。昔から軍事的な自己主張への意志に国民的な強さの指標が見られてきたことを想起すべきである。カルタゴが最終的に没落したのは、ローマと異なって、傭兵軍に依存したからである。第2次大戦後、ドイツはカルタゴにはならなかったものの、一つの決定的なカルタゴの条件を満たした。つまりドイツは、国民的利益を貫徹するための、あらゆる力による威嚇を最初から放棄したのである。その有名な公式は、「ドイツの地から二度と戦争を起こしてはならない」、というものである。この命題は、その無内容さを次の点で露呈している。つまり、それが、ライオンに直面した兎が、「僕は君を二度と咬まないつもりだ」と言うのと同じように聞こえる、という点で。ヨーロッパの地政学的状況に照らして、これは言わずもがなの空虚な言葉であるが、しかしまさにその点で、それはある政治的メッセージを含んでいる。つまりこの言葉は、一種の自己否定と結びついているのである。

アフガニスタンに派遣されたドイツ軍は、比較的安全な北部に配置され、戦闘部隊でなく社会救援部隊として位置づけられている。これには理由がある。もし実際に戦闘においてドイツ兵に死者が出たら、どんな連立政権であれ、ドイツ政府はそれを受け入れられないであろうからである。政治指導部がそのような事態にどう対応するかは、推測の域を出ない。しかしながら、二度の大戦の帰結と同じ結果が生じることは断言できる。すなわち、住民多数派における急進的な平和主義がそれである。そのモチーフは、我々の背後に横たわる20世紀の死者が平和主義の妥当性を示している、という

ものであるが、これは空虚な主張である。というのも、無条件かつ絶対的に戦死者を出さないというやり方は、別の帰結へと通じるからである。つまり、不可避的に攻撃的な特定の政治形式には総じて参加しない、それどころか、できることならそもそも政治から撤退したい、という帰結がそれである。それは、当初占領軍の盾の下で、次いでアメリカ主導のNATOの盾の下で実践され、ドイツ人の政治観の習い性となったような様式である。ドイツ軍の派遣を人道援助に限り、権力問題の観点では一切議論しないという事態は、イギリスとの差異を示している。このような撤退シンドロームは、連邦共和国も私的なものへの公的なものの縮減の兆候を示しているか、という問いを明確に肯定するものであろう。

周知のように、ニーチェは彼の文化批判の文脈において「デカダンス」の概念を新たに定義しようとした。その際、彼は「力への意志」の定式を利用した。つまり、この意志を持たないことに、彼はデカダンスの特徴を見たのである。ニーチェの概念は、ユダヤ＝キリスト教的道徳との闘争用語であり、そのままでは我々の問題への答えとはならない。しかし、それをその形而上学的イデオロギー的アウラから解放し、純粹に分析的に応用するなら、それは問題の核心を衝くものとなる。ニーチェは言う。『『ドイツ、世界に冠たるドイツ』、これはひょっとしたら最も馬鹿げた標語かもしれない。何故そもそもドイツなのか——と私は問う——、もしいずれか他の国が代表するよりも多くの価値をドイツが望み、代表し、表現しないのであれば。それだけでは、世界にもう一つの大国、もう一つの他愛なさが付け加わったにすぎない。』この文章は、力を物理的な次元でなく、精神的な次元で捉えている。ニーチェによれば、フランスに対するドイツの勝利を通じて、このような力は表現されなかった。戦争の力と知的な能力とは、この文章によれば、別のものである。

加えて、「力」という概念が最初からドイツ人に誤解されてきた、という事情が存在する。ドイツ人は、権力行使があたかも法の無効宣言を意味するかのようによく考えてきた。しかしニーチェが特に念頭に置いていた軍事大国ローマは、法を発明し、他のどんな大国よりも法を代表した大国でもあった。ドイツ人のこの誤解には、次の二つの歴史的背景が存在する。第一に、17～18世紀の旧帝国の地方的に構造化された諸邦の久しい軍事的政治的無力によって、ドイツ人は自らに加えられる外国の軍事力を「不法」と受け止めた。第二に、権力を得たが、それに慣れなかったドイツ人は、1914年におけるベルギーの中立の侵犯におけるように、軍事力をしばしば不法な条約破棄によって行使した。「彼らは神について語りながら、綿布について考える」という、19世紀末から20世紀初頭に流布した反英的語り口は、権力と法とを切り離して捉える傾向を顕著に示した。逆に言えば、権力はドイツにおいて最初から道徳的不信の重荷を背負わされてきた。

ドイツ人の社会的実践の日常を見てみよう。そこには、何かを欲し、何かを代表し、何かを表現することの欠如という、顕著な特徴が見て取れる。次に挙げるのは、一般人の特徴的なメンタリティを示す、5つのイメージである。1) 東独の小都市でスリッパを履き、パジャマを着たまの男が、近所

の店にミルクを買いにゆっくりと歩いて行く。彼には自らの不恰好を隣人に晒すことを恥じる様子がない。2) 西独の大学で満員の教室に若い学生が慌てる様子もなく遅れて入ってくる。授業は彼のような学生向けになっている。つまりは、3年後に卒業して水準以下の収入生活へと入る学生向けに。3) 午後のテレビ番組に不幸な人物が次々と登場し、自らの不幸を饒舌に説明する。自らの不幸をせめて誰にでも語ってよいようにしよう、と言わんばかりに。4) 帰宅途中の小学生。彼は、以前トルコ人の少年にお金を巻き上げられたことがあり、また盗られるのではないかとびくびくしている。トルコ人の少年が自分よりも強くて抵抗できないのか、彼は知らない。たとえ彼の方がトルコ人の少年よりも強かったとしても、そもそも彼は、どうすべきだったのかを、全く知らないのだ。5) 歩道を非常に肥満した若い婦人が三人の肥満した子供を連れて歩いている。一杯の飲み物と食べ物を手にしながら。これら5つのイメージは、自己表現への意志の喪失を肉体的に具現した、ある下層のメンバーを可視化する。これは、罪なく保護なく社会的不幸に陥る、新しい下層階級である。なるようになる(Sich-gehen-Lassen)——この公的な形式喪失は、社会的により高い層をも含め、今日ドイツ社会の至るところに見受けられる。これには、次の二つの新しい側面がある。

第一に、意志の喪失が、もはや別の場における力強い意志現前の対抗例を通じて妨げられることがない。言い換えると、意志を失った者を助け起こしてやれるような制度的社会的模範が存在しないのである。今日社会を導くいわゆる機能エリートは、何らの文化的道徳的精神的要求を持たずに社会を指導している。他のヨーロッパ諸国でも、伝統的な上層はその影響力を失ったばかりか、物理的にも消滅しつつある。ドイツにおいて、この皆伐は一層急進的である。ナチズムの壊滅的影響が戦後にも及んだからである。フロイトが指摘したように、野心(Ehrgeiz)という語によって名誉(Ehre)カテゴリーそのものが否定的に位置づけられたのは、ドイツ語だけである。

第二に、「闇の中にあるものは見えない」というブレヒトの名言が、その真実性を失ってしまった。まさしく闇の中にあるはずのものが、今日、私化された公共性というサーチライトの中に置かれているのだ。私的な猥褻、私的な醜悪というものは存在しない。商業的なルートだけでなく、公共放送の政治報道の中にさえも、私的なカタストローフが参入することは、犠牲崇拜を有名人崇拜へと変貌させるディスクールに属する。今日、ヨーロッパ中の政治家が、思想的に無意味であるにもかかわらず、ヨーロッパの植民地政策に対する謝罪を口にする。無意味と言うのは、イギリスのインド支配やフランスのアルジェリア支配についての否定的判断が正しいか否かとは全く無関係に、ヴィクトリア時代の植民倫理が今日の倫理によって埋め合わされたり、追い越されたり、修正されたりすることは、ありえないからである。それが可能であるときにのみ、謝罪は有意味となり、道徳的核心を持つことになる。このような謝罪連祷もまた、政治的なものと私的なものとの転倒に属する。

これまでに挙げた諸例を要約すれば、連邦共和国の特徴が明瞭となる。すなわち、社会扶助への政治の還元がそれである。ビスマルクの社会政策は、まだしも自らの政治的意志を貫くために労働者を

有めるといふ目的を有していた。とはいえ、それは国民を、「我々はどうなるのか」と問う人々と「我々は何が出来るか」と問う人々に、二分した。

ニーチェの概念を脱デーモン化して理解すべきときである。その際、ルーマンの遺作『社会の政治』が助けになる。そこにおいてルーマンは、権力を政治の媒体、すなわち「特別に象徴的に一般化されたコミュニケーションの媒体」として分析している。金を媒体とし、それを是認されている経済とは異なり、政治の媒体としての権力は、今日否定的に見られている。我々の社会のように権力を忌み嫌う社会においてそれが何を意味するのかを、ルーマンはこう予見した。「警察は現われてよい。しかしその場合でも、警察は手を出すことを急いでではない、」と。重荷を負わされたニーチェ的な権力と意志という概念を、ルーマンとともに、システム論的に冷静化すべきときが来たのかもしれない。というのも、権力を断念する者は、政治を断念することになるからである。「力への意志の欠如」は、政治への意志の放棄にほかならない。それは、「今日の社会において政治システムとして独立化した作用へのアクセス」を失うことを意味しよう。

『本号への序』¹²⁾

新しいものがより良いものだとする、しばしば自明と見なされている事柄は、証明されているわけではない。つい数世紀前まで、より良い新しいものは、真の古いものとして、つまり時の経過の中で見失われてしまった起源への回帰として表現されてきた。ルネサンスにおいて、新しいものへの渴望と体系的な探求と発見＝発明意志とが成立した。つまり、新しいものとその追求とは、近代の冒頭に位置している。新しいものとより良いものとは技術的科学的に自己生産されうる、絶えざる進歩が可能である、と考えられるようになったのである。このようなプロセスがヨーロッパで始まり、ヨーロッパによる世界の征服の前提条件を形成した。啓蒙と帝国主義、資本主義と民主政治——、前者も後者も同じヨーロッパの能力意識と獲得意志の産物である。

しかしながら、古代ギリシアから我々に伝えられた闘争と競争とへの欲望たる、アゴナールの原理は、我々の下でその魅力を失った。旧世界では、進歩の支持者よりも懐疑家の方が優勢である。保守がモットーとなり、変化はますます単なる危険と見なされつつある。まさしくかつての新しいものと進歩との主張者たる左翼は、今日真正の保守派として振舞っている。マルクスのテーゼに対するベンヤミンの次のような異議が、今日呼び起こされている。「革命は世界史の牽引車ではなく、人間による非常ブレーキの発動である。」——（左翼の）ユートピアとしての静止。

ヨーロッパは再び世界の小さな一部となったように思われる。西側と異なり、世界の人々は満足していない。「我々は現状のままでよい」と言う代わりに、アジアの発展する諸国は「もっと高く、もっと速く、もっと強く」というスローガンを掲げている。ギリシアに生まれたオリンピックの松明が、今年、中国に渡ることには、面白い偶然以上のものがある。

ヨーロッパ思想の基本的モチーフたる新しいものが不信を買ってしまったことには、十分な理由がある。とはいえ、我々の躊躇いと断念と不安とが新しいパラダイムや模範となりうる、と考えることは誤りであろう。というのも、好奇心 (Neugier) が人間の普遍的要素であるように、新しいものへの渴望 (Gier nach dem Neuen) は、精神的な儉しさ、いやそれどころか世界の縮減という犠牲なしに追放されえないからである。新しいものという原理は、アクチュアルな宗教的エコロジー的偽善に直面しても、その価値を全く減じないであろう。

本号は新しいものという原理を支持するのか。その通りである。ただし、重要であるのは、ある混合された弁証法的な原理である、という前提条件の下で。ボードレールが示したように、古いものは常に現前し続け、それへの切望こそがまさしく近代における新しいものの条件なのである。

註

- 1) 拙稿「現代ドイツにおけるアメリカニズムの受容——カール・ハインツ・ボーラーによるドイツ政治文化批評——」、『世界問題研究所紀要』第23巻、2007年、181~196頁。
- 2) これについては、拙著『再統一ドイツのナショナリズム——西側結合と過去の克服をめぐる——』ミネルヴァ書房、2003年を参照されたい。
- 3) 註2に挙げた拙著ではドイツ再統一と湾岸戦争とに対するボーラーの擁護論の文明論的構造を分析し(第5章「国民概念の文明論的根拠づけ——カール・ハインツ・ボーラー——」、117~149頁)、註1に挙げた拙稿では、主に、欧州連合が国民国家の解消を伴う「欧州合衆国」でなく、むしろ国民国家の「目的同盟」であることを論じたボーラーの評論を紹介した。
- 4) カールハインツ・ヴァイスマンを始めとする「八九年世代」の知的新右翼やその先達たるアルミン・モーラーにおいては、主権的な政治単位たるドイツ国民国家の独立と尊厳がその中心的思想であり、他方劇作家ポート・シュトラウスの審美的政治思想においては、ドイツ国民の宿命と悲劇的実存への共感がその核心を成している。前掲拙著の第1章「八九年世代による西側結合の批判」(27~52頁)、第2章「ドイツ版ゴリズムの提唱——アルミン・モーラーの政治評論——」(53~84頁)及び第6章「『右翼のファンタジー』への訴え——ポート・シュトラウス——」(151~174頁)を参照されたい。
- 5) Karl Heinz Bohrer, “Stil oder ‘maniera’? Zu Aktualität und Geschichte eines nationalen Unvermögens”, *Merkur*, Dezember 2002, SS. 1057–1069.
- 6) Karl Heinz Bohrer, “Die Ästhetik des Staates revisited”, *Merkur*, Sept./Okt. 2006, SS. 749–757.
- 7) Karl Heinz Bohrer, “Die eigentliche Fiasco des politischen Moralismus”, *Merkur*, Nov. 2006, SS. 1095–1098.
- 8) ボーラーは、ドイツ人がヨーロッパの一体性への偏愛から、それに距離を置くイギリス人の姿勢を時代遅れとして批判することについて、次のように辛辣に批評している。「ヨーロッパの状況に関するドイツ人の誤認は、イギリス人があらゆる政治的同盟に対して示す距離を、嘲笑と立腹とともに認識することから始まる。このことが、ヨーロッパをまさしくイギリス抜きで形成しようとする、暗黙の傾向へと繋がってきた。ドイツ人は、——それがどのようなものであれ——文化的政治的な差異がさしあたり克服できないものと思えるほど大きすぎることに気づくと同時に、それを時代遅れのナショナリズムとして拒絶する。さてイギリスないしグレートブリテンは、単に彼らの自己認識においてばかりでなく、ヨーロッパの歴史に精通する識者の見解においても、

多くの点でヨーロッパ文明の最も進歩した形を示している。……ナチズムによる世界支配の追求の挫折という20世紀最大の歴史的出来事は、それに対するイギリスのリアクション抜きではありえなかった。これを理解せず、(多くのドイツ人政治家のように)むしろイギリスの方がもういい加減に自らの国民史から離別すべきだと考える人は、そもそもヨーロッパについて語るべきでない。ヨーロッパの政治的文明の実質ばかりか、20世紀においてその生存さえもがお陰を被ったような国抜きでヨーロッパと取り組もうとすることは、歴史的な記憶能力の途方もない欠如を意味しよう。」Karl Heinz Bohrer, “Die europäische Differenz. Epitaph auf eine deutsche Utopie”, *Merkur*, Sept./Okt. 2000, S. 994.

- 9) ちなみに、2009年に発表されたボーラーの次の評論は、アメリカ西部劇を素材にして西洋文明における英雄的な現象をテーマとするものである。本稿で取り上げた一連の論文に見られる「様式」論と同様に、一応これも美学的な視点からの政治評論であると言いうるものの、この評論における「美学」は、国家の威厳を基礎付ける美学（「国家の美学」）によりも、むしろヨーロッパの政治的文明を逸脱する現象に関心を向ける美学（「衝撃の美学」）に近いように感じられる。Karl Heinz Bohrer, “Ritus und Geste. Die Begründung des Heldischen im Western”, *Merkur*, Sept./Okt. 2009, SS. 942–953. この評論では、ヘンリー・フォンダやジョン・ウェインが演じる西部劇の英雄が、米大統領リンカーンや第2次大戦の米将兵と比較されるのではなく、むしろボードレールのダンディズムやサルトルの主人公のメランコリーと比較されている。
- 10) Karl Heinz Bohrer u. Kurt Scheel, “Zu diesem Heft”, *Merkur*, Aug./Sept. 2007, S. 657–658. この文章は、「力への意志の欠如：デカダンス」というタイトルを冠せられたこの特集号の編者序文である。
- 11) Karl Heinz Bohrer, “Kein Wille zur Macht”, *Merkur*, Aug./Sept. 2007, S. 659–667.
- 12) Karl Heinz Bohrer u. Kurt Scheel, “Zu diesem Heft”, *Merkur*, Sept./Okt., 2008, S. 739–740. この文章は、「好奇心：ヨーロッパ的思考について」というタイトルを冠せられたこの特集号の編者序文である。